

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 地域ヘルスプロモーションセンター活動報告： 令和5（2023）年度

メタデータ	言語： 出版者： 公開日: 2024-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青柳, 秀幸, 富田, 一誠, 神事, 努, 青木, 康太朗, 小林, 唯, 高山, 真琴, 林, 貢一郎, 渡辺, 啓太 メールアドレス： 所属：
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000294">https://doi.org/10.57529/0002000294</a>

[報告]

# 地域ヘルスプロモーションセンター 活動報告

—令和5（2023）年度—

青柳 秀幸 富田 一誠 神事 努 青木 康太郎  
小林 唯 高山 真琴 林 貢一郎 渡辺 啓太

## 【要旨】

地域ヘルスプロモーションセンターは、國學院大學人間開発学部の目的の1つである「地域に育てられ、地域と共に育つ」人材を育成し、「共育」「響育」を実践する学部附設のセンターである。令和5（2023）年度は、4月のBloomingレクチャー、6月のたまプラウエルネスアカデミー2023、10月の第8回地域交流スポーツフェスティバル、11月の人間開発学会における発表を柱に、年3回の生きがい講座、学生主体の学生交流会、わくわく企画、年2回のセンターだより「響育」の発行を行った。

本年度はコロナ禍と比較して、催事の開催数のみならず、支援学生の会（ちーへる）に所属する学生の諸活動への参画率が回を増す毎に非常に高まった年度であった。学生の活動は、組織的かつ実用的に活性化した。本稿では、各活動の概要とアンケート調査結果の一例、そして、担当教員および学生が準備・運営を通じて得た所感を報告する。

## 【キーワード】

スポーツ 健康 地域貢献 学生教育 共育・響育

## 1. はじめに

地域ヘルスプロモーションセンター（以下、「センター」）は、國學院大學人間開発学部の目的の1つである「地域に育てられ、地域と共に育つ」人材を育成し、「共育」「響育」を実践する学部附設のセンターである。QOL（Quality of Life）の保持を基本的な理念に据え、健康とwell-beingの実現を模索している。「スポーツ」と「健康」をテーマに本学教員が自らの専門性を活かし、各種イベント、講座、研究の考案・企画・準備・運営・参加者とのコミュニケーション・知識のフィードバック・検証などを支援学生の会（ちーへる）の学生に直接指導し、共に活動することで、貴重な共育を実践し、学生一人ひとりの人間開発を目指している。同時に、これらの活動を通じて、地域貢献を含めて大学内外へ、國學院大學の特徴を発信している。

## 2. センターの概要

### 1) 運営委員

センターの運営は、本学人間開発学部：3学科（初等教育学科、健康体育学科、子ども支援学科）の専任教員、事務課職員が担当している。

専任教員：富田一誠〈センター長〉、神事努〈副センター長〉、青木康太郎、青柳秀幸、小林唯、高山真琴、林貢一郎、渡辺啓太

事務課：永清理奈（たまプラザ事務部 事務課）

### 2) 支援学生の会（ちーへる）

支援学生の会（ちーへる）は、本学公認部に属する学生主体の団体である。本年度からは、学内外の多くの方々の印象に残るように「支援学生の会」の愛称として「ちーへる」を加え、例年以上に親しみやすいセンターの組織化、運営を目指している。本年度の所属学生は、次の〈表1〉に示した通りである。

〈表1〉令和5（2023）年度 支援学生の会（ちーへる）所属学生の一覧

学年	氏名（五十音順、◎会長、○副会長）			
4	川原 佑樹	清住 今日子	齋藤 愛佳	佐藤 沙也香
	谷本 眞	中尾 公洋	中川 陽菜	中村 公祐
3	藍野 はな○	鈴木 あかり		
2	阿閉 怜奈	浅川 麻衣	小宮 詩歩	高田 勝太郎
	出牛 悠紀◎	中谷 心美○	長谷部 舞依	古田 椋大
	水島 裕太	宮下 拓斗	山田 颯人	
1	岩永 凜綺	長田 茉優		

### 3) 活動概要および活動スケジュール

本年度は、4月のBloomingレクチャー、6月のたまプラウエルネスアカデミー2023、10月の第8回地域交流スポーツフェスティバル、11月の人間開発学会における発表を柱に、年3回の生きがい講座、学生主体の学生交流会、わくわく企画、年2回のセンターだより「響育」の発行を行った。スケジュールの詳細を〈表2〉に示したので、併せて参照されたい。

次項より、各活動の概要とアンケート調査結果の一例、そして、担当教員および学生が準備・運営を通じて得た所感を報告する。なお、今回報告対象としたものは、令和5年12月時点で活動を終えた〈表2〉に示すグレーのハイライト部分とした。また、アンケート調査の分析結果は、百分率（%）で表し、合計が100%を上下する場合は、結果の傾向を左右しない微細な端数調整

を行った。回答項目や収集率は企画毎に異なり統一性がないため、一つの参考情報として参照されたい。

〈表2〉令和5（2023）年度 活動スケジュール

日付	活動名	主担当（教員）	主担当（学生）
2023年			
4/12（水）	学生交流会（1回目）	高山	宮下
4/15（土）	Blooming レクチャー	渡辺	出牛
4/19（水）	学生交流会（2回目）	高山	宮下
5/24（水）	総会	渡辺	高田
6/10（土）	たまプラ	林・小林	中谷
6/24（土）	ウェルネスアカデミー2023		
7/21（金）	『響育』第35号発行	神事	宮下
7/22（土）	わくわく企画	青木	阿閉
7/29（土）	〈生きがい講座〉 夏休み特別企画「野球で自由研究！」	神事	高田
10/15（日）	第8回 地域交流 スポーツフェスティバル	富田・青柳	古田・藍野
11/11（土）	人間開発学会 第15回大会	富田・林 小林・青柳	清住・中谷
12/9（土）	〈生きがい講座〉 ジャングル大冒険！！	青木	古田
2024年			
1/27（土）	〈生きがい講座〉 食の悩みを語りましょう	小林	浅川・小宮
2月	『響育』第36号発行予定	神事	宮下
2/21（水）	納会	富田・青柳	出牛・藍野・中谷

### 3. 各活動報告および担当教員、支援学生（ちーへる）の所感

1) Bloomingレクチャー：達人から学ぶ ～自分を拓く、未来を拓く～  
～逆転発想の勝利学 チームのスイッチを入れる～

本企画の目的は、学内外の聴講者が「健康」と「well-being」の実現を目指すとともに、新年度を迎える4月に自らの可能性を切り拓き、より輝く自分に近づくための新たな1歩を踏み出す後押しができるような機会を創出することである。また、各界の達人に自分自身を開花させた経

験や、人の開花を指導した経験などをご講演いただき、演者それぞれの「人間開発を学び、自分を拓く・未来を拓く」ことを目的としている。

第2回目の開催となった本年度は、バレーボール女子監督である眞鍋政義氏を招聘し、主に2012年に開催されたロンドンオリンピック競技大会においてチームを銅メダル獲得に導かれたご経験を中心に、逆転発想で勝利に導く指導や心のスイッチを入れるマネジメント術に関してご講演いただいた。

#### 【開催概要】

日 時：4月15日（土）13：00開場 14：00開演

共 催：人間開発学会

場 所：1号館 講堂

開催形式：ハイブリット開催（対面、Zoomによるライブ配信）

招聘講師：眞鍋 政義氏（バレーボール女子監督）

進行方法：オープニング、眞鍋氏による講演、眞鍋氏と渡辺によるQ&Aセッション、プレゼント企画・抽選、クロージングの5部構成

申込人数：192名

参加人数：184名（対面：88名、オンライン：96名）

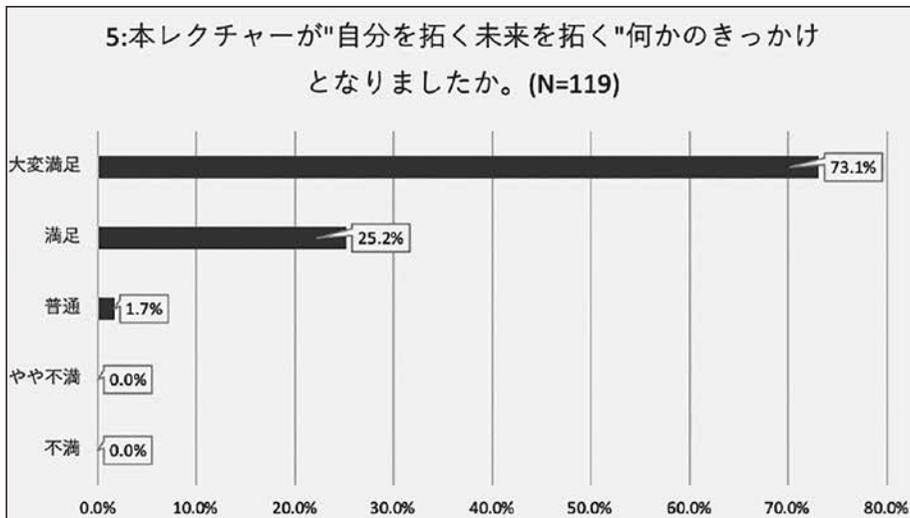
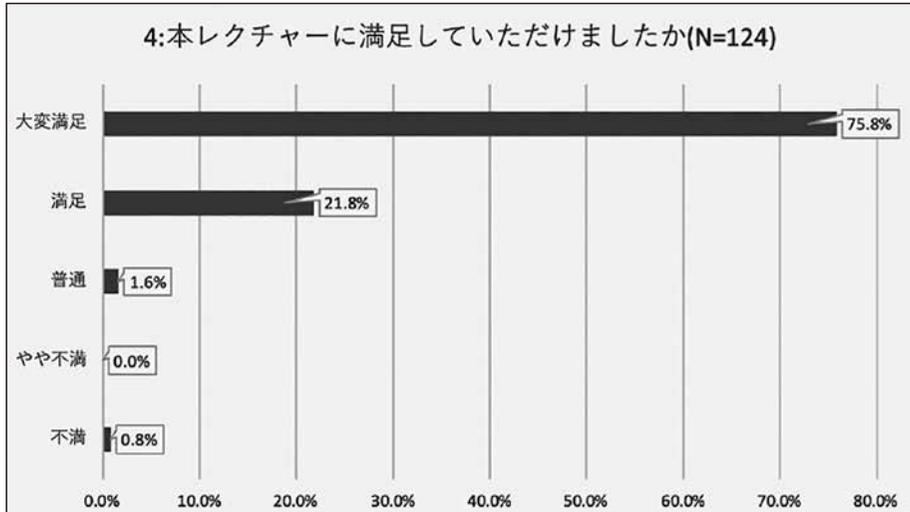
参加教員：富田、神事、青木、青柳、小林、高山、林、渡辺

支援学生：17名

出牛悠紀（主担当）、浅川麻衣、阿閉怜奈、藍野はな、清住今日子、小出憲史、小宮詩歩、齋藤愛佳、佐藤沙也香、鈴木あかり、高田勝太郎、中谷心美、中村公祐、長谷部舞依、古田椋大、水島裕太、宮下拓斗

#### 【アンケート調査結果の一例】

次に示すアンケート調査結果より、回答者の97.6%が本企画に対して「大変満足した」もしくは「満足」したと回答したことが明らかになった。また、本企画が「自分を拓く・未来を拓く何かのきっかけとなりましたか」という設問に対して、98.3%の回答者が、「大変満足」もしくは「満足」と回答したことが明らかになった。



【担当教員の所感】

「カリスマ性もなければ天才でもない」と自身を語る眞鍋氏から、どのように低迷したチームに変化をもたらしてきたのか、組織・人のスイッチの入れ方やその戦略的思考が惜しみなく披露され、リアルな実体験に基づく話に参加者らは引き込まれ、あっという間に時間が経過した。眞鍋氏がお話されたように、1秒で切り替えることができる心のスイッチをうまく操りながら、それぞれのもつ可能性の芽をBloomingさせていくきっかけになったのではないかと考えられる。

(健康体育学科：渡辺啓太)

### 【担当支援学生（ちーへる）の所感】

今回のBloomingレクチャーは、今年度に入って最初の仕事であり、役職も一変し、教職員の方々や支援学生も新体制で行った。支援学生が企画する学生交流会などと準備が同時期だったこともあり、準備が慌ただしくなった印象がある。前日準備・当日運営では、多くの支援学生が参加し、教職員の方々も含め、協力して企画運営をすることが出来た。講演中も特に多くのトラブルはなく、情報を共有し合って、レクチャーを成功させることが出来たと考える。一人一人がそれぞれの役割を持ち、大きな企画を運営するという事は、私たちにとって貴重な経験になったように感じる。今回出た課題を来年度のBloomingレクチャーに活かしたいと考える。講演会の内容自体も興味深いものが多く、物事の考え方をプラスにする事でどのような利点があるのかなど、スポーツの面以外にも日常生活に精通するようなお話を聞くことが出来た。

（健康体育学科2年：出牛悠紀）



## 2) 学生交流会

本企画は支援学生の会（ちーへる）主体のイベントであり、センターに興味のある新入生と学生とが仲を深め、交流するイベントである。学生は、参加者がセンターに対して少しでも興味・関心を抱けるように、具体的な活動内容や日々の取り組みを紹介・説明した。

### 【開催概要】 および満足度

日 時： 1 回目\_4月12日（水）12：30～14：00

2 回目\_4月19日（水）12：30～14：00

共 催：人間開発学会

場 所： 1 回目\_ SS1 アリーナ、バイオメカニクス実験室

2 回目\_ バイオメカニクス実験室

開催形式：対面

参加教員：高山、富田、渡辺、青柳

参加人数： 1 回目\_2名、 2 回目\_5名

支援学生： 1 回目\_11名、 2 回目\_9名

宮下拓斗（主担当）、浅川麻衣、阿閉怜奈、清住今日子、齋藤愛佳、高田勝太郎、出牛悠紀、中谷心美、小宮詩歩、長谷部舞依、古田椋大

### 【担当教員の所感】

学生交流会（以下交流会）は、レクリエーションと説明会の二部構成で企画されました。担当学生は、交流会の準備について、企画内容のみならず、情宣、参加者の誘導に至るまで、考え得る状況を想定して入念な準備ができていました。参加者とのレクリエーションの後、地域ヘルスプロモーションセンターの活動に支援学生の会がどのように関わるかについて、茶菓等も用意し、リラックスした雰囲気の中で参加学生への説明が行われました。先輩たちの真摯で熱意ある態度が、参加者の入会を決定させたように感じました。

学生交流会は、学生が主体となって企画、運営するものです。過去の経験を元に、柔軟な発想で新たな仲間を増やして欲しいと思います。

（初等教育学科：高山真琴）

### 【担当支援学生（ちーへる）の所感】

学生交流会に向けて、チラシを使った宣伝や授業前の宣伝を行い、少しでも多くの学生に対して交流会について認知してもらうための広報活動を事前に行うことができた。当日は何名の学生が参加してくれるのかわからない部分も多かったが、支援学生と参加してくれた学生の仲がゲームなどを通じて少しでも深まったと感じた。また、センターについて少しでも知ってもらうため

にスライドを用いたほか、写真などを紹介することでイメージが浮かびやすくなるような工夫もできたと感じる。しかし、参加者が少なかったことは課題であると思ったため、来年度は開催日時を含め広報活動などもう一度見直して、より良い活動になるよう考えていきたい。

（健康体育学科2年：宮下拓斗）



### 3) たまプラウェルネスアカデミー2023

本企画は、本学部の専任教員を講師とし、主に大学近隣に在住する中高齢者の健康・体力計測およびフィードバック、健康に関する講話などを行うもので、令和4（2022）年度に初開催され

た。企画の目的は、次の3点である。1）地域住民の健康への意識向上、2）地域ヘルスプロモーションセンター発の健康増進のための質の高いエビデンスの構築、3）学生の健康指導に関する知識・経験値の蓄積。本企画は、参加者に3年毎に縦断的に測定を行い、最終的に12年間継続して測定を行うものである。新規開催年度は、2022年度から2024年度で、本年度は2度目の開催であった。開催概要は〈表3〉の通りである。両日とも対面で実施し、人間開発学会に共催いただいた。

〈表3〉 たまプラウエルネスアカデミー-2023 開催概要

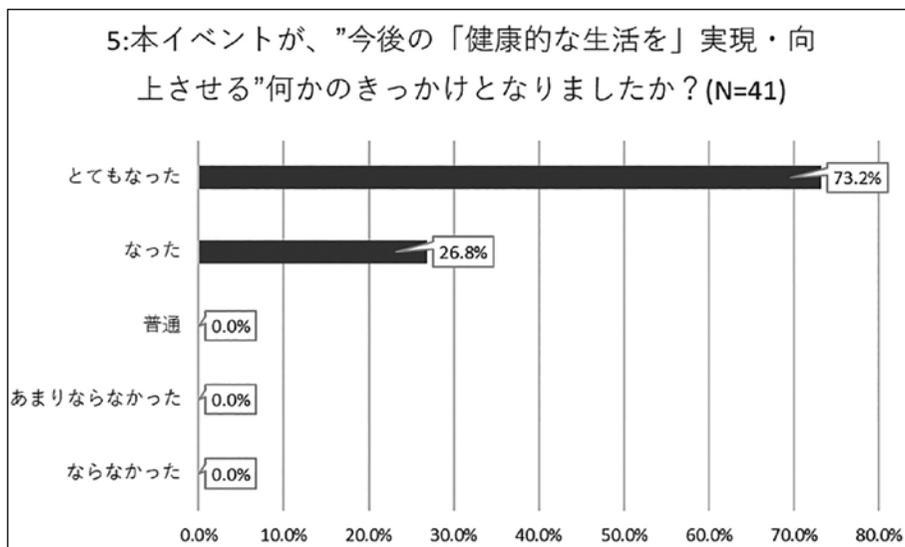
	第1回	第2回
日 付	6/10（土）	6/24（土）
時 間	9:00～12:00 / 13:00～16:00	10:00～11:30 / 13:00～14:30
場 所	SS1 バイオメカニクス実験室	
担当教員	林貢一郎、小林唯、富田一誠、青柳秀幸	
内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・骨密度計測</li> <li>・血管年齢計測</li> <li>・認知機能計測</li> <li>・体力測定</li> <li>→柔軟性、握力、膝伸展筋力、 ロコモチェック、歩行速度、 タイムアップ&amp;ゴー、 30秒立ち上がり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1回目の測定結果説明</li> <li>・食事や栄養、運動の重要性に関する講話</li> <li>・ストレッチング</li> <li>・認知症予防運動</li> <li>・筋力トレーニング</li> </ul>
参加者数	41名	39名
支援学生	9名	5名

支援学生：第1回\_\_中谷心美（主担当）、阿閉怜奈、清住今日子、高田勝太郎、谷本眞、出牛悠紀、古田椋大、水島裕太、宮下拓斗

第2回\_\_中谷心美（主担当）、岩永凜綺、齋藤愛佳、高田勝太郎、宮下拓斗

#### 【アンケート調査結果の一例】

次に示すアンケート調査結果より、本企画が「『健康的な生活を』実現・向上させる何かのきっかけとなりましたか？」という設問に対して、100%の回答者が、「とてもなった」もしくは「なった」と回答したことが明らかになった。



【担当教員の所感】

昨年度の本イベントと比較して、かなり安定した活動ができていたと考えられる。例年どおり、問題点としては測定の技術（精度）が少し低いことがあげられる。測定の練習を徹底する必要があると感じた。フィードバック時の運動指導はよいが、中高齢者に必要で、かつ自宅でできるような運動の紹介を増やすほうがよいと感じた。

（健康体育学科：林貢一郎）

【担当支援学生（ちーへる）の所感】

第1回目は、参加者の方々の測定を支援学生がサポートした。自分の測定結果に一喜一憂しながらも、参加者に対して積極的にコミュニケーションをとる学生の姿も多くみられ、参加者の方々の笑顔を見ることができた。私は骨密度測定を行い、測定値の説明や今後の対策などを参加者に伝えた。加齢に伴い生活習慣の乱れによる健康問題が起こりやすくなるため、早いうちからの生活習慣の改善や運動習慣を身に着けることが必要であると感じた。

第2回目は、第1回目に測定をしたデータを返却し、それぞれのデータに対する説明を先生方が行った。その後、私たち学生が自宅でも簡単に行うことのできるストレッチ、脳トレ、筋トレを紹介した。実際に参加者のみなさんと私たちのお手本のもと、運動を行いました。私は日頃のストレスなどによって無意識に入る肩への力をリラックスさせる効果を持つストレッチや、猫背や肩こり予防のための肩甲骨ほぐしを紹介しました。イベント終了後、参加者の方々から「学生たちが笑顔で接してくれて嬉しかった」、「自分の健康について見直す良い機会となった」など嬉しいお言葉をたくさん頂くことができた。

今回のイベントは申し込みの時点で定員を超える数多くの地域住民の方々が参加申し込みをし

てくございました。その期待に応えられるよう、測定のはらつきを防ぐために事前に測定方法や機械の使い方を先生に教えていただきレクチャーしました。反省点も多く残りましたが今後に向けて改善をして日々前進していきたいと思ひます。

（健康体育学科2年：中谷心美）





#### 4) わくわく企画 ～はしって、とんで、なげて、あそぼう！！～

本企画は学生主体のイベントであり、支援学生の会（ちーへる）が企画や準備（ポスター制作、小学校への広報活動、アンケート作成、借用物品の手配など）、当日の運営を行った。今回は、美しが丘小学校および山内小学校に通う1～6年生の児童と、その保護者を対象とし、様々な身体運動を行うことを目的とした。当日は、参加者に名前と学年、チーム分けを記した手作りのリストバンドを手渡しし、全体で開会式や準備体操を行った。その後、ますおに、しっぽとり、ドッジビーの3種類のゲームを行った。

#### 【開催概要】

日 時：7月22日（土）10：00～12：00

共 催：人間開発学会

場 所：SS1 アリーナ

開催形式：対面

参加教員：青木、富田、青柳

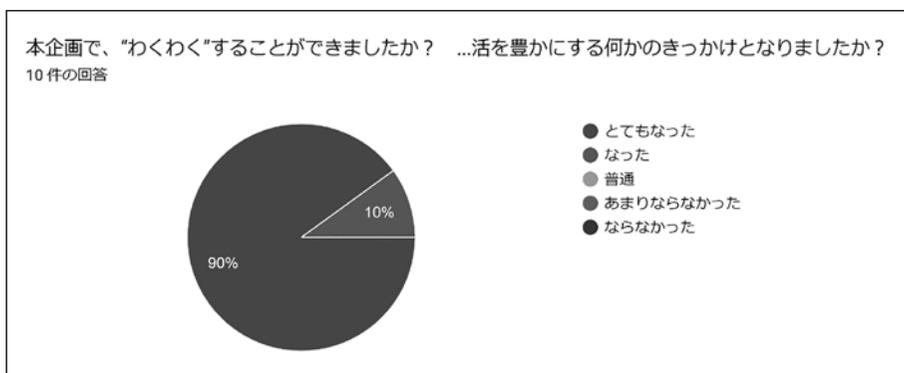
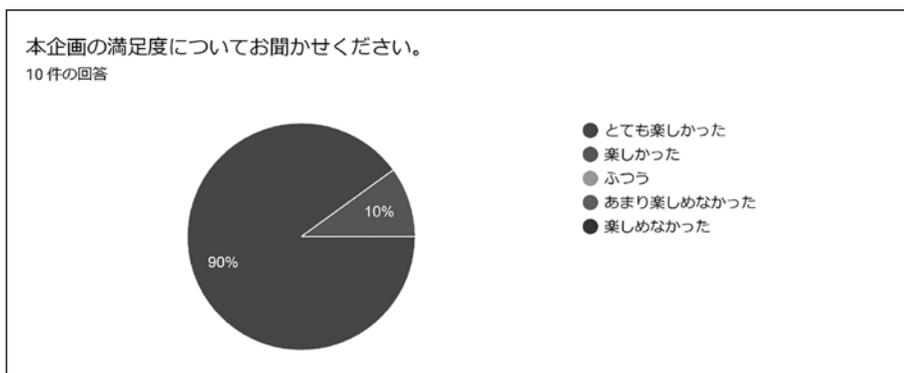
参加人数：35名（定員40名）

支援学生：13名

阿閑怜奈（主担当）、藍野はな、浅川麻衣、岩永凜綺、長田茉優、清住今日子、小宮詩歩、谷本眞、出牛悠紀、中谷心美、中村公佑、長谷部舞依、宮下拓人

【アンケート調査結果の一例】

次に示すアンケート調査結果より、回答者の100%が本企画に対して「とても楽しかった」もしくは「楽しかった」と回答したことが明らかになった。また、「本企画で“わくわく”することができましたか？ 今後の生活を豊かにする何かのきっかけとなりましたか？」という設問に対して、100%の回答者が、「ともてなった」もしくは「なった」と回答したことが明らかになった。



【担当教員の所感】

今年のわくわく企画は、近隣に住む小学生がたくさん参加してくれました。プログラムはますおに、しっぽとり、ドッチビーの3種目でしたが、いずれも子どもたちがいきいきとした表情で楽しむ様子がみられ、とてもいいプログラムだったことがうかがえました。今年は去年の課題を踏まえ、広報から活動の準備、当日の運営・指導まで学生同士で連携・協力をしながら進めることができたのではないかと思います。次年度は、この成果を活かし、さらによりイベントになるようがんばってみたいと思います。

（子ども支援学科：青木康太郎）

【担当支援学生（ちーへる）の所感】

昨年度の「わくわく企画」は、参加者が1家族4名のみであり、今年はそのリベンジの意味も込めて、広報活動に力を入れ、イベント当日の約1か月前には小学校へのチラシの配布を行った。締め切りよりも前に定員いっぱいの応募があったときは、嬉しい思いの半面、イベントを成功させるための準備に責任を感じた。また、学生主体のイベントということで、自分自身経験の少なさを痛感したが、全員で役割分担をし、協力して準備を進めることができた。当日は、たくさんの小学生と保護者、未就学児の兄弟が来てくださり、ゲーム中では参加者の笑顔が絶えず見受けられ、非常にやりがいを感じた。学生にとって、1からイベントを開催するという経験をし、多くのことを吸収できたよいイベントだったと思う。

（健康体育学科2年：阿閉怜奈）





#### 5) 第8回 地域交流 スポーツフェスティバル ～9つの体験で秋を彩ろう～

本企画は、大学と地域とを「スポーツ」と「健康」というキーワードで繋ぐ、センターの代表的な一大イベントである。8回目の開催となった今回は、約3ヶ月前から準備を開始し、「企画」、「運営」、「広報」といった従来の3部門に加えて、全ての部門を統括する「統括」部門を設けた。コミュニケーションツールアプリである「Teams」を活用しながら、対面やオンラインで部門ミーティング、全体ミーティング、ブース対象ミーティングを定期的に行い、情報共有や課題発見・解決を重ねた。サブタイトルの「9つ」は、展開したブースの総数である。参画した学生の一覧は〈表4〉、各ブースの概要は〈図1〉を参照されたい。なお、球技場で開催予定であった2つのブースは悪天候を考慮し、前日に開催場所を室内（1号間教室）に変更した。

【開催概要】

日 時：10月15日（日）10：00～15：00（12：00～13：00は休憩時間）

共 催：人間開発学会

場 所：SS1、1号館

開催形式：対面

申込人数：事前申し込み\_292名 当日参加\_70名

参加人数：279名

担当教員：富田、神事、青柳、青木、小林、高山、林、渡辺

〈表4〉スポーツフェスティバルに参加した学生の一覧（順序不同）

植原ゼミ			渡辺ゼミ			伊藤ゼミ		
渡部 真衣	高橋 知暉	山口 碧衣	谷本 眞	佐藤 孝成	小山 裕士郎	吉野 瑠真	高橋 良多	中島 みなみ
土方 一輝	古賀 真音	関 やよい	頃安 樹	金子 竜樹	有田 萌希	安孫子 あみ	坂本 明咲実	山田 達也
菅原 樹里	早川 明日斗	吉田 桃子	高橋 慈	大橋 応寛	安室 皓平	森田 雄大	町田 佑衣	小曾根 祐希
小林 京	前田 茉那香	松崎 佳純	加藤 大介	佐藤 稜太	陶山 聡太	岡林 飛翔	中村 悠人	田中 愛梨
安田 恵竜	馬庭 大器	井上 豪佑	畑野 雅実	木下 駿	塩田 哲	村上 翔大	坂本 匡平	
斯波 慶行	三浦 菜々	松井 海周						
石井 創太	海賀 真悠子							

青木ゼミ			富田ゼミ			神事ゼミ		
日比谷 麻理香	中山 莉花	山下 真美海	齋藤 愛佳	鶴田 悠乃	堀 日南	作野 友哉	島 孝明	山田 龍之介
内海 遥帆	齋藤 乃愛	中村 杏	清住 今日子	河野 みさ	谷水 里咲	小屋 新大	池田 祐樹	長尾 宏太
小野寺 彩夏	保科 真子	阿部 彩由美	永森 涼花	小國 夢花	河野 未沙	瀬田 秀太	鶴田 健吾	田川 柚紀
田中 あかり	小寺 那奈	勝又 泉美	内匠 航大	吉川 颯人	小山 晶子	青木 はな		

元原ブース（サポートスタッフを含む）			林ゼミ			小林ゼミ		
佐藤 千晶	後藤 美帆	山田 龍之介	加藤 まなみ	尾上 麻衣	尾見 桜子	小金井 麻名	榎井 優央菜	伊藤 勇輝
石橋 圭弘	赤塚遥斗	仲村 知夏	中川 陽菜	宮本 みなみ	船本 叶	越智 直希	片岡 達哉	
服部 翔	伊地知 賢造		山本 涼太郎	山本 敦寛				

支援学生の会（ちーへる）								
浅川 麻衣	阿閉 怜奈	藍野 はな	清住 今日子	小宮 詩歩	齋藤 愛佳	高田 勝太郎	中谷 心美	中村 公祐
長谷部 舞依	古田 椋大	水島 裕太	山田 颯人	宮下 拓斗	岩永 凛綺	長田 茉優	川原 祐樹	谷本 眞
出牛 悠紀								

【担当教員の所感】

当日は事故なく参加者が笑顔で参加・帰宅され、スポーツフェスティバルが無事に成功したことを教職員・学生らが体感できる結果となった。子どもたちと交流する学生らの笑顔や真剣な眼差し、事後の慰労会で発せられた喜びや安堵の言葉の数々からは、約3ヶ月間に渡って積み重ねられた努力と経験とが、生きた学びと成果に繋がった様子が窺えた。3ヶ月間に渡って準備した支援学生のみなさん、そして、各ブースのみなさん、本当にお疲れ様でした。

一方、準備段階を振り返ると、企画や準備を進めた支援学生の中心は2年生で、上級生からサ

ポートを得つつも、学生らは日々試行錯誤していた。学生らはスポフェスに関する一連の活動において、善戦ではなく苦戦していたと考えるのが統括部門の担当教員である筆者の率直な所感である。開催間近に数多くの調整や作業が必要となり、前日準備が当初の予定よりも大幅に長引いてしまった結果から明らかなように、準備に不足があり、事前に対応しておくべき・しておくことができた事柄が散見された。事前に対応できていれば、当日の質をより一層向上させるために時間とエネルギーを充てることができた。この主な原因は、状況・情報共有と部門内・間での連携・協働の仕方にあると考える。さらに言えば、こうした原因の根本には、日々の支援学生の会（ちーへる）の在り方（学生一人ひとりの主体性や学生間の関係性、コミュニケーションの状況）に関する課題がある。

学生は、上述の問題点や課題をスポフェス終了後にも再度痛感することになった。意思疎通ができず、全体反省会の開催が延期されたからである。その後、4年生の積極的なサポートや、2年生数名の自発的なリードにより、全体反省会は1月15日に開催予定である。支援学生らは延期開催に向けて、今後の活動のために必要な改善や対策を話し合い、スポフェスのみならず、慢性的であった既述の支援学生会（ちーへる）の課題に対峙している。こうしたスポーツフェスティバルを契機とした出来事や活動は、今も学生らを大きく成長させている。

スポーツフェスティバル当日の成功に加えて、反省や振り返りを成し遂げ、真の意味でスポーツフェスティバルを成功に導いて貰いたい。今の過程は、センターの今後の活動や次年度以降のスポーツフェスティバル、そして、近い将来社会に出た学生のみなさんの活躍を、次のステージに押し上げてくれます。最後までベストを尽くして協働していきましょう。

（健康体育学科：青柳秀幸）

#### 【担当支援学生（ちーへる）の所感】

当日は朝からあいにくの雨であったが、約300名の方々にご来場いただいた。今年度は、より多くの方々に足を運んでいただけるよう、感染症対策に注意を払いつつも、制限を緩和して運営した。スポーツ現場でのケガに対する応急処置を学べるブースや、頭と身体を同時に使って運動し、脳を活性化させるブースなども加わり、多くの方々に健康やスポーツに関する学びや体験を提供することができた。カフェラウンジ（万葉の小径）やキッチンカーの営業もあり、来場された方々に一日中楽しんでいただけるような工夫を施した。また、初の試みとしてサポートスタッフを募り、8名の協力を得た。数名は「ちーへる」への加入を検討中で、センターの活動のPRにもなった。

（健康体育学科2年：宮下拓斗）

# Welcome to

## スポーツフェスティバル

### 9 つの体験で 秋 を彩ろう!!

**食品サンプルを使った  
健康チェック**

@SS1 B1階

さわった感じまでホンモノそっくりの「食品サンプル」を使って、いつも食べている食事のバランスをチェックしてみましょう!

**体験してみよう!  
スポーツ現場での  
応急処置**

@SS1 B1階

いざというときのために応急処置の知識と技術を身に付けておこう。心肺蘇生術(胸骨圧迫・心臓マッサージ)、人工呼吸、AED)、松葉杖などをやってみよう!

**いろいろな動きを  
試してみよう**

跳んだり、走ったりいろんな動きをアスレチック形式の遊びを通して体験しよう! 運動が苦手な子もぜひチャレンジしてみよう!

**スポーツゲームセンター  
～スポーツ王に俺はなる～**

@SS1 B1階

スポーツに必要な能力である反応の速さやコントロールの良さをゲームを通して測ってみよう! 目指せ、スポーツ王! 君の挑戦を待っています!

**いろいろな遊びに  
チャレンジ**

@SS1 B1階

ストラックアウトやラダーゲッター、釣りっこなど普段の生活では体験できないような様々な遊びにチャレンジしよう! 頭と体を使っているんな遊びにチャレンジ

**え、なんで?**

@SS1 B1階

動かぬものがなぜ動く? 行きたいところに行かぬ「逆転送路」、右は左か上が下か? 「必殺! 料理人」が、鬼滅の刃いや、「点滅の刃」で、この世の闇を「一刀両断」

**みんなでエンジョイ!  
広いグラウンドで  
野球遊び**

@球技場

並びっこベースボールをやるわ! ちょっと変わったルールの野球に挑戦! 簡単なゲームなので、未経験者や運動が苦手な子でも大丈夫!

**脳と体を一緒に鍛えよう!  
～ブレイン&フィジカル  
チャレンジ～**

@球技場

楽しみながら体と脳を活性化させ、「自分の身体を思い通りに動かせるようになる」きっかけを掴もう! 猫とねずみ、ビンゴリレー、ボールパスを体験しよう!

**みんなでやろう  
体力測定**

@SS1 1階

大人も子供も! 体力測定で今の自分をチェックしよう! 筋力や柔軟性の測定、ロコモチェックもできます。

〈図1〉当日掲示したブース紹介チラシ



アスレチックで身体を動かそう



食品サンプルで健康チェック



スポーツ現場での応急処置



体組成分析測定



ロコモ度テスト



剣道体験



ストラックアウト



上手に跳べるかな



キッチンカー



つりめいじん



## 6) 生きがい講座

「生きがい講座」は、本学部の教員が専門知識を活かして開講するもので、本年度は3回の開講を企画した（2回開催済み）。以下に順を追って報告する。

### 6.1) 夏休み特別企画「野球で自由研究！」

本企画は小学校5年生以上を対象とし、野球経験者だけでなく、野球をしたことがない子どもも数多く参加した。講師は、健康体育学科：神事先生が務め、「からだのしくみ」や「速いボールの投げるコツ」、「変化球が曲がるしくみ」など最新の野球事情について講義がなされた。講義は2部制で進められ、特に紙でっぼうを使った実験は大盛況で子どもたちは終始楽しんでいる様子であった。運営は、支援学生のみならず神事ゼミに所属する学生の協力を得た。

#### 【開催概要】

日 時：7月29日（土）10：00～11：30

共 催：人間開発学会

場 所：SS1 バイオメカニクス実験室

開催形式：対面

参加人数：25名（定員30名）

参加教員：神事、富田、青柳

支援学生：4名

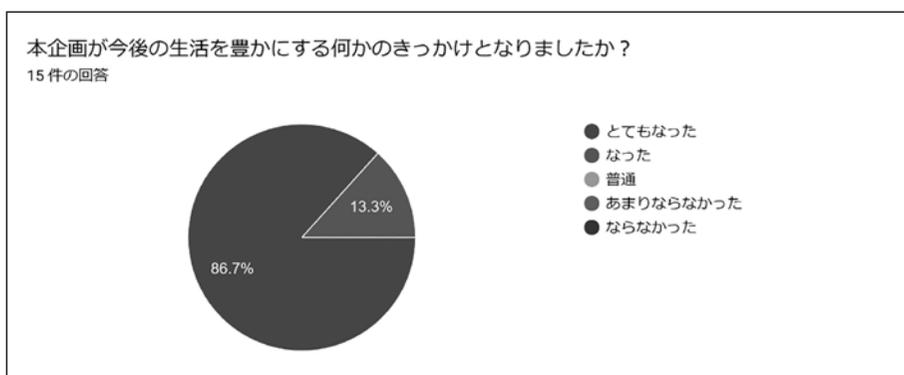
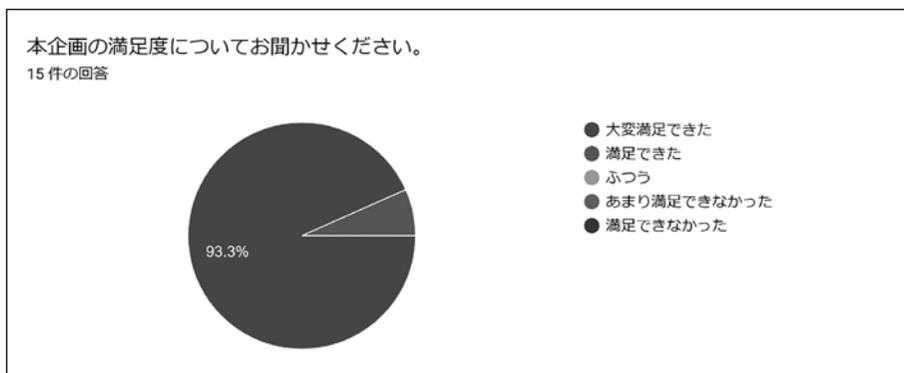
高田勝太郎（主担当）、長谷部舞、古田椋大、宮下拓人

ゼミ学生：3名（神事ゼミ）

恵藤伸泰、瀬田秀太、山田龍之介

#### 【アンケート調査結果の一例】

次に示すアンケート調査結果より、回答者の100%が本企画に対して「大変満足できた」もしくは「満足できた」と回答したことが明らかになった。また、「本企画が今後の生活を豊かにする何かのきっかけとなりましたか？」という設問に対して、100%の回答者が、「ともてなった」もしくは「なった」と回答したことが明らかになった。



### 【担当教員の所感】

当日は学生の補助もあり、企画自体は問題なく進めることができた。今回は「小学校5～6年生推奨」としたが、難易度はちょうど良かったように思う。

30名の定員に対して、どの程度の参加者があるのか見当も付かなかったため、新石川小学校へのチラシの配布とインターネットによる広報のみに今年度は留めた。30名の定員確保にはちょうど良かったように思う。来年度は、定員を50名にして、他の小学校へのチラシを配布しても良いかもしれない。

（健康体育学科：神事努）

### 【担当支援学生（ちーへる）の所感】

4月中旬より始動し、ポスターやPTA説明会用の資料を早めに作れたことがよかった点だと考える。今回から担当を2人にしたことにより、お互いが忙しい時や予定が入っている時にしっかりと仕事の分担をすることができた。当日は、支援学生が少ない中、効率よく準備を進めることができた。一週間前に行われたわくわく講座での反省を生かし、子どもへの対応がよかったと感じた。この経験を生かして、スポーツフェスティバルもより良いものにしていきたい。

（健康体育学科2年：高田勝太郎）



## 6.2) ジャングル大冒険！！

よけて、くぐって、走って、投げて！

からだをたくさん動かしてみんなで色々な遊びを楽しもう！

本企画は年長児および小学校1・2年生を対象とし、「ジャングル大冒険」をコンセプトに、様々なゲームを通して子どもたちが走る、投げるなどの様々な動きを体験することを目的として開催された。青木ゼミ学生が企画、運営、司会進行を行い、青木ゼミ学生と支援学生は、子どもたちと共にゲームを楽しんだ。スタッフの自己紹介の後、アイスブレイクとして「こおりおに」が行われた。その後、4チームに別れ、オリジナルルールによるドッジボールや障害物リレーなど3つのゲームを行った。それぞれのゲームでの順位に応じた数の宝石を獲得することができ、その数を競い合った。ゲーム間には作戦会議の時間が設けられ、子どもたちと学生とがアイデアを出

し合い、ゲーム攻略のためにコミュニケーションを図った。

### 【開催概要】

日 時：12月9日（土）10：00～12：00

共 催：人間開発学会

場 所：SS1 アリーナ

開催形式：対面

参加人数：24名（定員30名）

参加教員：青木、青柳

支援学生：5名

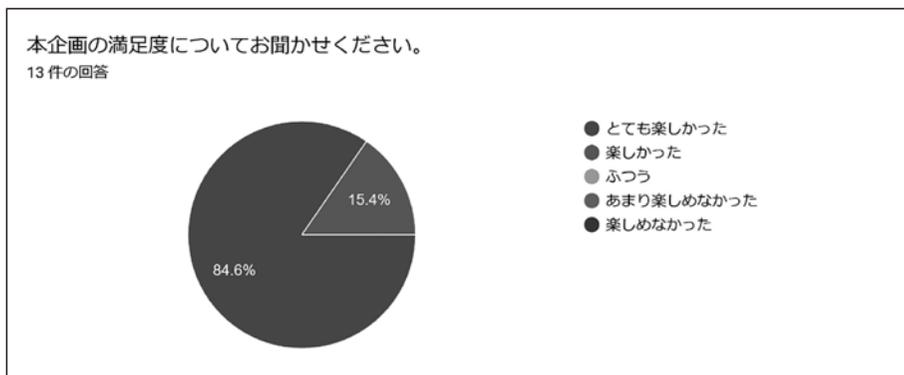
古田椋大（主担当）、浅川麻衣、高田勝太郎、中村公祐、長谷部舞依

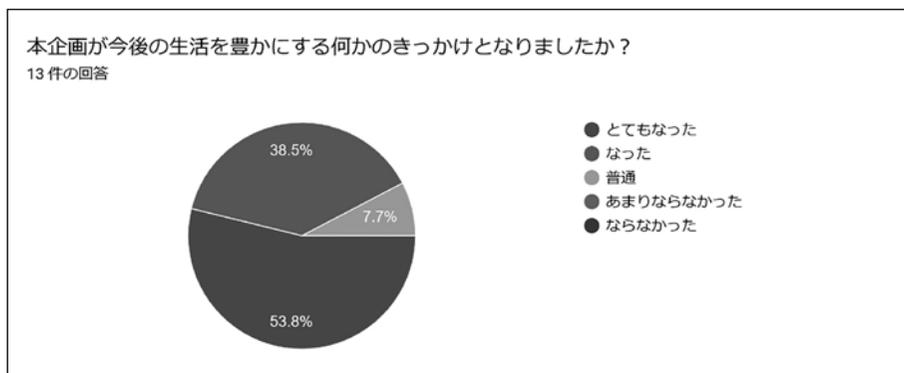
ゼミ学生：15名

有本陽菜、大本明日香、内海遥帆、大倉千明、小寺那奈、小野寺彩夏、勝又泉美、  
齊藤乃愛、仙北谷真生、田中あかり、中村杏、中山莉花、日比谷麻理香、保科真子、  
山下真美海

### 【アンケート調査結果の一例】

次に示すアンケート調査結果より、回答者の100%が本企画に対して「とても楽しかった」もしくは「楽しかった」と回答したことが明らかになった。また、「本企画が今後の生活を豊かにする何かのきっかけとなりましたか？」という設問に対して、92.3%の回答者が、「ともてなった」もしくは「なった」と回答したことが明らかになった。





### 【担当教員の所感】

今回の生きがい講座は、地域の子ども30名を対象に、青木ゼミの学生が中心となって運動遊びプログラムを企画・実施しました。プログラムは、ジャングルをテーマに、昔遊びやドッジボール、障害物リレーをアレンジしたゲームを行いました。アンケートでも「楽しかった」の回答が100%であったことから、参加した子どもたちは充実した時間を過ごせたと思います。次年度は、この成果を活かし、さらによいイベントになるようがんばりたいと思います。

（子ども支援学科：青木康太郎）

### 【担当支援学生（ちーへる）の所感】

子どもたちにとって、チームの仲間はほとんどが初めて顔を合わせるこどもや学生だと思われるが、すぐに打ち解け、活発にゲームに取り組む様子が印象的だった。なかには、保護者から離れて消極的なこどももいたが、ゲームをしていくうちに緊張がほぐれ、作戦会議でアイデアを出したり、ゲームに勝って喜びを表現したりするなど、最後はみんなが楽しめた様子だった。学生は、チームのなかで一人になるこどもを作らないように、コミュニケーションをとる相手を変えながら全員をケアするような動きが自然に見られた。ときにこどもに負けない感情表現や運動をして、良い雰囲気を作り出していた。

普段はなかなか関わる機会がない園児と小学校低学年を対象としたイベントだったが、自己紹介や作戦会議などの時間を通して、学生とこどもたち、運動の得意不得意を越えて交流を楽しめた。1チームに数人ほど学生が帯同し、まんべんなくこどもたちのケアができた。話すことが苦手そうな子どもに積極的に声をかけていると、その子からゲーム攻略のためのアイデアが出るようになり、チームが一致団結した瞬間を感じる事が出来た。

（健康体育学科2年：古田 椋大）



### 6.3 食の悩みを語りましょう ～乳幼児期の子どものための食育講座～

本企画は、保育現場において管理栄養士としてご活動中の駒谷恵理氏（サンフラワー・A株式会社）をゲスト講師として招聘し、管理栄養士・公認スポーツ栄養士の資格、経験を有する健康体育学科の小林先生がコーディネーターを務めて開催予定である。事前に食に関する悩みや相談を募り、参加者らと共に語り合う場を設ける予定である。また、当日はリトミック室で開催し、支援学生に加えて子ども支援学科の学生の協力も得ながら、キッズスペースや遊具を準備予定である。

【開催概要（予定）】

日 時：2024年1月27日（土）10：00～11：00

共 催：人間開発学会

場 所：1号館 リトミック室（予定）

開催形式：対面

参加人数：定員\_\_乳幼児期の子をもつ保護者20組

参加教員：小林、青柳

支援学生：浅川麻衣（主担当）、小宮詩歩（主担当）、ほか7名参加予定、5名調整中

7) 國學院大學 人間開発学会 第15回大会における発表

本年度は、初の試みとして学生2名が学会発表した。当日は対面形式で開催され、学部教員のみならず、学会員である学部生や賛助会員に加えて一般の方々も来場し、約50名の参加があった。太田直之学会長（人間開発学部長）が開会挨拶において「人間開発学という理念を定着するこの学会で、多彩な専門分野の発表・議論を期待しています」と述べられた本大会において、学生は下記の題目で発表した。どちらの発表も日頃のセンターの活動成果に基づいたもので、2名とも初の学会発表であったが、自信をもって臨み、質疑に対する受け答えもそつがなく、会場からは称賛の拍手が送られた。また、他にも3名の学生が会場設営や受付、後片付けなどの大会運営補助業務を担った。

演 者：中谷心美（健康体育学科2年）

共同演者：富田一誠、青柳秀幸、林貢一郎、小林唯

演 題：人間開発学部 地域ヘルスプロモーションセンター活動報告

演 者：清住今日子（健康体育学科4年）

共同演者：林貢一郎、小林唯、富田一誠、青柳秀幸

演 題：中高齢女性の筋力と栄養習慣・運動習慣の関連性について

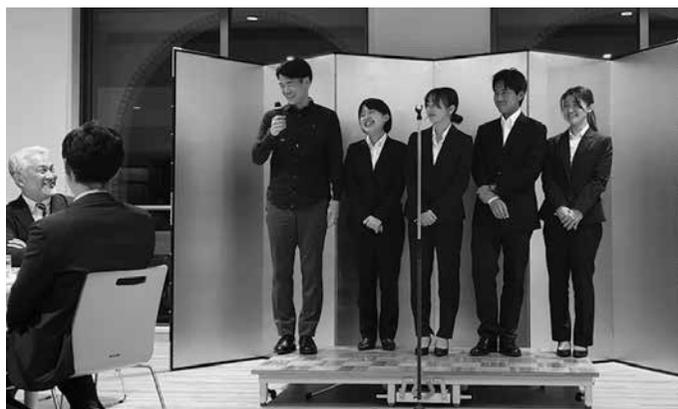
運営補助：川原佑樹、長谷部舞依、中尾公洋

【担当教員の所感】

今回、人間開発学会初の学生による研究報告を行った。前半は、中谷さんが当センターの活動報告を、後半は、清住さんがたまプラウエルネスアカデミー2023の活動により得られた研究結果から、キャンパス周辺住民中高齢者女性の筋力と栄養習慣と運動習慣の関連性を発表した。学生にとって、学会発表は初めての経験であり、得られたデータの整理、結果の見せ方、考察の仕方、

発表スライドの作成、発表の工夫などとても苦労していた。しかし、共同演者による助言を元に、当日は、とても堂々と立派に発表を行うことができた。今回の人間開発学会の学生による研究報告の指導を経験してみて、自ら企画、準備、運営、計測、フィードバック、検証を行い、さらにもう一歩、得られた知見を人に知ってもらうために発表するという、一連の経験を学生ができたことは、当センターが目指す、共育・響育の貴重な実践の場をさらに一歩進めることができたのではないかと考えた。後日、他の学部教員から、「学会の趣旨に沿った素晴らしい発表機会であった」、「人間開発を実践できる学部の理念に即した素晴らしい活動であった」と評価いただいた。

（健康体育学科：富田一誠）



#### 4. センター活動における支援学生（ちーへる）の関わり

センター運営委員の教員と支援学生の会（ちーへる）の学生は、議論を重ね、活動に必要な年間スケジュールの明示、行事ごとの準備運営マニュアルの提示、情報共有のプラットフォーム（Teams）を確立した。これらのソースを基に、支援学生の会（ちーへる）の学生は、役割分担を決め、自主的にセンターの活動に参画し、準備・運営・検証を行った。学生各人が、企画、広報、申し込み受付、当日運営、アンケート作成・集計などの一連の活動に責任をもって奮闘し、

さらに、担当教員が共に活動することで、実践的に多くの貴重なノウハウを学ぶことができた。そして、広報活動や当日運営をする中で、実際に幼児から高齢者まで幅広い年齢層の地域の方々との交流の機会を得ることができ、全身で成果や課題を体感できた。

一方で、コロナ禍の影響に起因する学生間のコミュニケーションの希薄さが課題となっていたが、支援学生は日頃より3号館に所在するセンターという「場所」に集いながら一連の活動を経験することで、その課題は大きく改善できた。4年生が学生間の交流を活発化させようと後輩らに積極的に声かけや気遣いをしたほか、時には食事会を開催するなどしたこともあり、今では下級生が主体となってミーティングや交流の場を設け始めている。センターは、年間約10回の催事を開催するため、準備・運営・検証を繰り返す一連の活動では、言うまでもなく日々の情報共有・発信（報告、連絡、相談など）がとても重要になる。こうした基本＝スキルは、学生らが卒業後に社会に出た際に必須であるため、学生らには、常日頃からコミュニケーションを大切にしているセンターでの経験を生かして、社会人として必要な土台を築いて貰いたい。

## 5. おわりに

本年度の活動を振り返ると、本年度はコロナ禍と比較して、催事の開催数のみならず、諸活動への学生の参画率が回を増す毎に非常に高まった年度であった。今回得られたアンケート結果からは、回答者の90%から100%がセンターの活動に肯定的で、各種企画がその後の生活を豊かにする何かしらのきっかけとなったことがわかった。今後も、当センターが担える役割を吟味し、発信と活動を継続していきたい。

支援学生の会（ちーへる）の活動は、4月から続く行事の経験を礎に、10月末に開催されたセンターの一大イベントであるスポーツフェスティバルを経て、より組織的かつ実用的に活性化した。また、今回初めてセンターの活動内容と研究成果を学会発表という形に昇華させたことは特筆すべき点であった。

次年度は、学生数が多かった現4年生の卒業に加えて、学生数が最多の2年生が3年生となり、インターンシップや教育実習で多忙になる。そのため、新たなメンバーを積極的に迎え入れると共に、基本ができつつある情報共有・発信（報告、連絡、相談など）を積極的に行き、事前準備により一層取り組んでいく必要がある。そして、特に次の3点を重視して欲しい。

- 1) 「地域ヘルスプロモーション」を名称に冠したセンターや、その活動の意味・意義とより一層向き合い、企画当日の質を向上させること。
- 2) 令和5（2023）年度の活動を今一度振り返り、新年度を展望すること。
- 3) 令和5（2023）年度の活動の結果や成果を前向きに受け止め、成功や失敗、あらゆる経験や感情を楽・愉しみつつ、世代交代も意識しながら継続して日々の活動に励むこと。

以上の事柄に取り組むことで視野が拡がり、令和5（2023）年度の学びや経験が深みを増して、良いスタートを切れると考えられる。

最後に、センターは、本学人間開発学部の目的の1つである「地域に育てられ、地域と共に育つ」人材を育成する、「共育」「響育」の実践の場となっていると言える。地域に支えていただきながら、地域に拓かれ続けるセンターで在り続けられるよう、センター運営委員は、引き続き学生の主体性を育みながら、学生と共に教育・研究活動に注力していく所存である。

## 6. 謝辞

本年度のセンターの活動にご協力・ご参加くださいました地域の方々、そして、日頃よりセンターの活動をご支援いただいている人間開発学会および本学事務課のみなさま、運営委員の永清理奈氏、師澄江氏、繁山有加氏に対して、運営委員一同、心からお礼申し上げます。

(あおやぎひでゆき 國學院大學人間開発学部健康体育学科助手)

(とみたかずなり 國學院大學人間開発学部健康体育学科教授)

(じんじつとむ 國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授)

(あおきこうたろう 國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授)

(こばやしゆい 國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授)

(たかやままこと 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授)

(はやしこういちろう 國學院大學人間開発学部健康体育学科教授)

(わたなべけいた 國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授)